

弥陀の誓願不思議にたすけられまいらせて、往生をばとぐるなりと信じて念仏申さんとおもいたつところのおこるとき、すなわち摂取不捨の利益にあずけしめたまうなり。弥陀の本願には、老少・善悪のひとをえらばれず、ただ信心を要とすとしるべし。そのゆえは、罪惡深重煩惱熾盛の衆生をたすけんがための願にてまします。しかれば本願を信ぜんには、他の善も要にあらず、念仏にまさるべき善なきゆえに。悪をもおそるべからず、弥陀の本願をさまたぐるほどの悪なきがゆえにと云々。

第2組 清浄寺住職

波佐谷 宏昭

text by Hiroaki Hasatani

## 第一章 「弥陀の誓願不思議」

### 不思議

「弥陀の誓願不思議にたすけられまいらせて」の「不思議」とは、われわれの思い計らい、虚妄分別（思議）を超えているということです。私たちは意識するあらゆることに対して、自分のことであるか、ないかを区別し、「良い」とか「悪い」とか、「意味がある」とか、「意味が無い」とか「言葉」によって意味付けをしていきます。ありのままの世界は、本来、言葉では表現し尽くすことの出来ない、広くて深い豊かな内容をもっているのですが、「言葉」を用いて考え、表現する私たちは、「言葉」によって縛られて、ありのままの豊かな世界を見失っていきます。そのような意識のはたらきを虚妄分別（思議）と教えられます。ですから、私たちは、ありのままを生きているのではなく、自分の価値観に基づく「言葉」によって作られた「真実とは違う世界」を生きているということなのでしょう。自分の価値観に基づいて作られた世界は、自分を中心として狭く浅くとらえた世界であり、「私の思いよりも広くて深くて豊かな世界」を見失った世界です。そこには感動も感謝もなく、「今、私が生きている」ということも当たり前には感じられないのです。

### 呼び覚ます「法」

そのような私たちの根本の闇は、迷いを迷いと知らないということ、分別によって作り上げた世界を生き、自らの分別によって虚しくなっているということを知らないということなのです。そういう私たちの闇、分別による闇を破るのは、分別を超えたはたらき、分別の世界とは全く質の異なる「法」のはたらきとの出遇いなのでしょう。宗祖は、そのような迷いを迷いと知らせ、感動と感謝を呼び覚ます「法」のはたらきを「弥陀の誓願不思議」といただかれたのです。

あらゆるものを分別していく私たちは、「念仏する」ということも、「往生」ということも、分別し、解釈していきます。解釈は出来ても、納得することは出来ません。まさに私たちの分別を超えた不思議です。しかし、「分別を超えた不思議だから、何も考えずに、南無阿弥陀仏と称えておればよい」ということではありません。肝心なことは「分別し、解釈していく在り方そのものが迷いであることが明らかにされる」ことなのでしょう。分別が無効であることを知らせ、分別の闇を破るところに、「不思議」という意味があるのです。

### 自力無効

私たちは自分の思いを一番大事にし、自分自身を頼みにして、私を大きくし、安定させ、堅固なものにしていくことによって、自分自身をたすけようとし、そういう私たちは、仏の教えも、解釈し自分に取り込むことによって、自分自身を大きくし、安定させ、堅固にしようとしていきます。しかし、私たちが本当にたすかる道は、自分自身を大きくし、安定させ、堅固なものにして自分をたすけようという方向ではなく、今まで握りしめていた価値観を捨て、「私」への執着を離れるところにあるのです。私の力で「私」から離れることは出来ませんが、ありのままを失っている私たちを、本来の世界に目覚めさせようと

いう「法」との出遇いにおいて、はからずも、「私」への執着を離れることが出来るので  
しょう。「自分で自分を救うことは出来ない。法によって救われる」という救済の原理が  
「弥陀の誓願不思議にたすけられまいらせて」という言葉で表現されているのではないか  
と思います。